



平成 30 年 11 月 21 日
佐賀大学理工学部

ベトナム・カントー大学の理工学部長表敬訪問と 「低平地技術に関するアジア協働研修プログラム」の実施

【概要】

ベトナム・カントー大学工学部交通工学科長、水理工学科長らを本学に迎え入れ、理工学部長の表敬訪問とともに、「低平地技術に関するアジア協働研修プログラム」を実施しました。

【本文】

ベトナムのカントー大学（Can Tho University, Vietnam¹⁾）の Le Gia Lam 工学部交通工学科長、Tran Van Ty 工学部水理工学科長、ならびに 3 名の学生を本学に迎え、渡 孝則理工学部長を表敬訪問するとともに、「低平地技術に関するアジア協働研修プログラム」を実施しました。後者のプログラムでは、大学院工学系研究科博士前期・後期課程の学生にも受講の機会が設けられており、「都市工学考究 II」（博士前期課程）、または「PPGA 短期インターン研修」（博士前期・後期課程）として、所定のプログラムの履修を終えた後の単位交付の仕組みが整えられています。

カントー大学とは、平成 28（2016）年 8 月 21 日（日）、門出 政則 前副学長・理事（研究・社会貢献担当）を団長とする佐賀大学の代表団が現地へ赴き、大学間交流協定が締結されました²⁾。それまでの農学部教員を主軸とする活発な研究・教育交流が続けられていたことに加え、理工学部教員も新たに交流を始めることになり、一挙に同協定締結の運びになりました。

カントー大学の一行は、平成 30（2018）年 11 月 16 日（金）に渡 孝則 理工学部長を表敬訪問しました。「低平地技術に関するアジア協働研修プログラム」参加の機会を与えられたことのお礼を始め、最近の交流実績について報告するとともに、国際共同研究資金の獲得、カントー大学において学位未取得の教員を始めとする学生の大学院工学系研究科博士前期・後期学生としての留学生受入など、今後の展望に関する議論が活発に交わされました。本学においては、宮崎 耕治 学長による東南アジアを主軸とする国際戦略構想が表明されたばかりであり、ベトナムはその主要国の一つに数えられており、絶妙のタイミングでこのたびの表敬訪問が実現したといえます。



カントー大学の Lam 交通工学科長（前列右）ならびに Ty 講師（前列左）による
渡理工学部長（前列中央）の表敬訪問記念写真

平成 30（2018）年 11 月 12 日（月）から 16 日（金）にかけて、「低平地技術に関するアジア協働研修プログラム」を実施しました。

同プログラムに先駆けて、STEPs（指導教員：大渡 啓介 教授（機能物質化学科）、Khan MD. Tawhidul Islam 准教授（機械システム工学科）³⁾）との間の交流会が設けられました。STEPs の学生による理工学部の説明から始まり、カントー大学の学生の緊張感をほぐす数々のイベントが用意され、カントー大学の学生は以後、リラックスした様子でプログラムに臨むことができたようです。

その後、三島 悠一郎 講師（都市工学科）による開会式ならびにオリエンテーションが行われ、プログラムが始まりました。初日の講義では地盤分野の教員による内容が提供され、日野 剛徳 教授（都市工学科）ならびに Lam 博士（交通工学科長）が登壇しました。2 日目の講義では水分野の教員として Ty 博士（水理工学科長）ならびに三島 講師が登壇し、以後のプログラムに弾みをつけました。3 日目は水をテーマとする現地視察に臨み、佐賀市下水浄化センター、干潟よか公園、巨勢川調整池ならびに佐賀水ものがたり館へと足を運び、各施設の関係者から丁寧な説明を受けました。4 日目は地盤をテーマとする現地視察に臨み、有明海沿岸道路（佐賀福富道路）の建設現場（六角川大橋・地盤改良）ならびにワイビーエム岸山工場へと足を運び、学修を重ねました。5 日目は受講生のプログラム集大成としての成果発表会が実施され、その後の閉会式で一人ひとりに修了証が手渡されました。



カントー大学の学生と STEPs の交流の様子



Lam 交通工学科長による講義の様子



KJ法を用いたワークショップの様子



巨勢川調整池の視察



有明海沿岸道路（佐賀福富道路）・六角川大橋建設現場の視察



ワイビーエム岸山工場の視察



成果発表会の様子



修了証授与の様子



閉会式を終えて

このたびの「低平地技術に関するアジア協働研修プログラム」は、平成 25（2013）年 3 月に実施された「低平地に関する ASEAN 協働教育プログラム」に端を発しています。当時の低平地沿岸海域研究センターにおける有志の間で課題として感じていたのは、教育と地域・社会（就職先）の間の隔たりのみならず、教育と研究の間の隔たりでした。特に研究エフォートに重点が置かれる組織に属する有志ならではの盲点の気付きであったかもしれません。時には有志間の激しい議論も経て、研究と教育は車の両輪をなしてこそ共存共栄するとの共通認識にたどり着き、荒木 宏之 元教授（元低平地沿岸海域研究センター長）の音頭のもと、井嶋 克志 元低平地沿岸海域研究センター長（都市工学科教授）、日野 教授、三島 講師ならびに東南アジアにおける研究仲間によって立ち上げられました⁴⁾。同プログラムは、今日では問題発見・解決型学習（Project-Based Learning：PBL）と呼ばれるスタイルの先駆的存在をなし、PBL の呼称が定着するまでは研究実践的教育（Research-Based Education：RBE）と呼び、今日の学修者能動的学習法（Active Learning）におけるカテゴリ-4 の内容が主流を占めるものでした。

今回の「低平地技術に関するアジア協働研修プログラム」はまさに上記の内容を踏襲するものであり、その後、東南アジアにおける研究仲間が同じ発想の猛追をみせようとしています。インドネシアのハサヌディン大学における研究仲間は、ついに工学部土木工学科内に国際コースを設けて入学生を誘い、グローバルズムのエリート養成とともに上記の PBL(RBE) を主とした教育・研究を展開し始めています。このコースで 4 年生に進級した学生たちの一部は、2 ヶ月間にわたり都市工学科にインターンシップ生として留学する予定です。

末筆となりましたが、このたびの「低平地技術に関するアジア協働研修プログラム」の実施に際し、佐賀市下水浄化センター、干潟よか公園、巨勢川調整池、佐賀水ものがたり館、佐賀県有明海沿岸道路整備事務所ならびに株式会社ワイビーエムの皆様からは、多大のご高配を賜りました。記して感謝の意を表します。

- 1) Can Tho University: <https://en.ctu.edu.vn/>, 2018.
- 2) 佐賀大学国際交流推進センター：協定校一覧（大学間）、国際交流推進センターについて、佐賀大学国際交流推進センター, <http://www.irdc.saga-u.ac.jp/ja/about/partneruniversities.html>, 2018.
- 3) STEPs at Saga University What's the STEPs? : Student Association of Excellent and Progressive Spirit (STEPS), 佐賀大学工学部, <https://www5.hp-ez.com/hp/susteps/page8>, 2018.
- 4) 荒木宏之, 日野剛徳, 三島悠一郎：研究センターにおける教育貢献について～低平地に関する ASEAN 協働教育プログラムを実施して～, 低平地研究, No.22, pp.56-63, 2013.